

津高同窓会報

環境めぐる



発行所
〒514-0042 津市新町3丁目1-1
津高等学校
同窓会事務局
TEL・FAX 059-229-7331
共立印刷株式会社

| | | | |
|----------------|---|-----------------|----|
| ご挨拶 | 2 | 津高創立一四〇周年記念事業 | 2 |
| ホームページ企画母校のころ旅 | 3 | 思い出 暉さんのこと | 9 |
| 〈なつかしい恩師の今〉 | 3 | 機会を得て人は生まれ変わる | 10 |
| 〈あなたのころ旅〉 | 5 | 故郷に赴任して | 10 |
| 95歳水彩画初個展を終えて | 8 | 有造塾が開催されました! | 11 |
| ついでに | 8 | キャンパスツアーと有造塾の講義 | 12 |
| 津人の一人として | 9 | 津高一四〇周年募金寄付者御芳名 | 12 |
| 津高創立一四〇周年記念事業 | 2 | 進路状況 | 14 |
| ホームページ企画母校のころ旅 | 3 | 各地で同窓会開催 | 14 |
| 〈なつかしい恩師の今〉 | 3 | 物故者 | 15 |
| 〈あなたのころ旅〉 | 5 | 令和五年度総会・パーティー | 15 |
| 95歳水彩画初個展を終えて | 8 | を終えて | 16 |
| ついでに | 8 | 令和六年度総会・パーティー | 16 |

同窓会長 飯田 俊司 (昭和36年卒)



会員の皆様には平素より同窓会活動にご理解とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

令和二年一月に国内で発生した新型コロナウイルス感染症は何度も変異を繰り返して、八波に渉る全国感染の度に国民の行動が規制され、同窓会活動は中止を余儀なくされました。

漸く本年五月に全ての規制が無くなったため、六月に同窓会総会(出席者五八八名)を、また九月に東京(出席者

二〇五名)、十月に名古屋(出席者一七名)、十一月に大阪(出席者九九名)の支部総会が四年振りに開催されました。各会場とも和気藹々とした雰囲気の中、久しぶりの旧友との再会、先輩・後輩との交流やアトラクションを楽しみ、時が経つのを忘れられました。

津高は令和二年コロナ禍の中、創立百四十周年を迎えましたが、記念事業の実施を一年延期、規模の縮小で対処せざるを得ませんでした。

主な記念事業としては、同窓会名簿「あお母校」の発行、九九〇名の会員の賛同を得た記念募金(八、二五五千円)、母校正門前並木道にヒマラヤ杉

の植樹などの校内緑化整備、昭和49年卒の現香港大学チエアプローチサーの小菅一弘さんによる記念講演を開催

しました。

今夏日本は過去に例のない猛暑に見舞われました。六〜八月の平均気温は平年と比べて1・76度高く、九月も2・66度高と一八九八年に気象庁の統計開始から二二五年で最高となりました。また熱中症による救急搬送件数は七八・六一九人と多発しました。

世界に於いても、今夏の平均気温は観測史上最高を記録し、各地で異常な熱、豪雨、旱魃、巨大なサイクロン、ハリケーン、台風などが多発し甚大な被害をもたらしました。

「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰の時代が到来した」とのグテレーヌ国連事務総長の言葉もつなげます。気温の上昇は農業や畜産に、また海水温の上昇は漁業に悪影響をもたらす最近の物価高の要因の一つとなっています。

地球温暖化・沸騰化を引き起こす二酸化炭素やメタンガスなどの温室効果ガスの排出削減は待ったなし、一刻も



創立140周年記念事業として正門前にヒマラヤ杉14本を植樹

タイトル・書 工 藤 雅 俊 (昭和45年卒)

早く世界が一体となって取り組まなければならぬ事態です。最後になりましたが、津高及び津高

同窓会の益々の発展と会員の皆様のご健勝、ご多幸をお祈りします。

ご挨拶

三重県立津高等学校長 辻 成尚



会員の皆様には、日頃より本校教育の充実・発展のために、深いご理解と多大なご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

本校は現在、各学年八学級、約

九六〇人の生徒が在籍し、日々の学習活動で対話的な学びを通して論理的に考える力や、他者を理解・受容して自分の考えを発信する力を育むなど、主体的に学ぶことにより真の学力を身につけることを目指しています。また、電子黒板機能付きプロジェクターや一人一台端末等、ICT機器を効果的に活用した学習活動を進めています。

IV期目の指定を受け、世界を牽引する科学技術人材の育成を目指して、一層深化した探究活動を全校生徒が進めています。また、昨年十月に姉妹校提携した台湾の高雄市立中山高級中學との相互訪問による交流もスタートしました。

さて、新型コロナウイルスで多くの教育活動が影響を受けたことは、本校も例外ではありません。本年度に入って、例えば九月の文化祭を四年ぶりに一般公開するなど、ようやくコロナ禍前の教育活動を取り戻すことができました。以前は「あたりまえ」「毎年続くこと」であっても、それができなかった三年間を経験してみると、できること自体がありが

たいと思うことがあります。生徒の皆さんにも話していることですが、新型コロナウイルスだけでなく、十数年前の東日本大震災などのように、これから何十年もの未来を生きていく中で、予測のつかないことが発生して、「いつもあり」にいかないことがきつと起こります。その時に「今できる最善のことは何か」「どんな工夫ができるか」など、「どうするか」を考え、行動する力が求められます。そのヒントとなるのは、本校でこれまでも実践してきたように、イレギュラーな状況であっても決して自分の目標を見失わず、やるべきこと、できることに確実に取り組むこと、豊かな心、やさしい心遣いや行動を忘

津高創立一四〇周年記念事業.....

令和二(二〇二〇)年十一月一日、津高は創立一四〇周年を迎えました。新型コロナウイルスという未曾有の脅威に、一部中止を余儀なくされた事業がありながらも、新たな生活様式に合わせインターネットを活用した企画を進めました。

コロナ禍で実施した記念事業をここに紹介します。

創立一四〇周年記念式典及び記念講演会

令和三年十月二十五日に、津高の地学室に於いて、目録贈呈式および記念講演会を開催しました。

生に、構内の緑化整備のための樹木の寄贈の目録が贈呈されました。続いて、東北大学名誉教授・香港大学工学部電機電子学科学科チエアプロフェッサーの小菅一弘氏(昭和49年卒)に「ロボティクスの挑戦まだ道半ば」と題して講演していただきました。香港と



全教室をオンラインでつなぎ、生徒と事前申し込みの同窓生が聴講しました。

緑化整備

皆様からの募金の中から、令和四年二月正門前にヒマラヤ杉十四本(表紙写真)、構内に桜十本を(駐輪場近く六本・駐車場三本・正門二本)植樹し、記念碑を設置しました。また令和五年一月と三月には、辻校長、奥田先生、深澤先生、藤田先生と、樹木医の中尾さん(昭和39年卒)、佐々木さん(昭和45年卒)、大萱さん(昭和51年卒)、戸田一四〇周年記念事業実行委員長(昭和44年卒)、と同学年有志の延べ二人がボランティアで校内の樹木を間伐しました。





香港で質問に答える小菅教授(左)・教室で質問する生徒(記念講演会で)

記念募金

令和四年十一月までに、のべ九九〇人の皆様から、八、二五五、〇〇〇円の募金をお寄せいただきました。
令和三年七月以降の寄附者、芳名は本文十二頁〜十三頁に掲載しています。

※添付のQRコードから、ホームページの全文を読んで頂くことができます。



ホームページ企画
母校のこころ旅

へなつかしい恩師の今

津高で教鞭を取られた先生方五人から、在職時の思い出を寄せていただきました。四人の恩師のコメントの一部を抜粋し、「こころ」紹介します。

井坂 剛 先生

学校長 (在籍期間：平成四年〜平成八年)

津高在職中の思い出



になり、それぞれの学校は特色ある学校案内を作るのに懸命であった。そんな

坂部 勝美 先生 (昭和35年卒)
担当教科：数学 (在籍期間：昭和六十年〜平成七年)

津高での思い出 修学旅行と噴火



津高でお世話になったのは二度。最初は十六歳〜十八歳、高校生として。二度目は四五歳〜五三歳、教員として。その二度とも修学旅行で火山噴火に出く

な中、平成五年の十二月に生徒会顧問の沢口哲弥教諭がいかに手作り感覚の一冊のパンフレットを校長室へ持ってきてくれた。表紙には「吾輩は津高である」とあり、漱石が右手に「津高のすずめ」を握っている絵が描かれている。編集は津高等学校生徒会執行部となっており、私の手に届いた時にはもうすでに校区内の多くの中学校には配布済みだったようだ。当時の津高の大方の先生たちは、このパンフレットの存在を「存じではなかったであろう。校長会などで、学校案内の作成が話題になるたびに、生徒会の諸君が作ってくれた「吾輩は津高である」に勝る学校案内はないだろうと誇りに思っていた。

その巻頭言は、生徒会長の浮嶋寛之君が書いている。「偏差値に振り回されてはいけない。自分の「勉強」ができるような学校、充実した高校生活を送れそうな学校を自らの手で選択することこそが最も重要だ。その参考にすれば」と、この冊子作成の主旨を述べている。

「自由」「伝統」「部活動」などを各章で取り上げているが、第四章の生徒会行事に特徴がある。この学校案内パンフレットには津高生が日ごろ感じている生の声そのまま書かれているので、中学生にもとてもわかりやすく、学校が編集したそれとは大違いである。これぞ津高高校生ならではの学校案内となっている。

任。十月五日出発の九州修学旅行の準備もほぼ出来上がった六月三日、雲仙普賢岳が噴火、火砕流で四三名もの犠牲者を出す恐ろしい自然災害が起りました。修学旅行の予定には、島原での一泊、半島周遊もコースになっていました。協力いただいている旅行会社から「代替のホテルが確保できない」との悲鳴の連絡が入りました。五〇〇名以上の人を、言っただけ受け入れるホテルを見つけるのは無理でしょう。修学旅行実施がピンチでした。その後の関係者の努力と修学旅行委員会を中心とする生徒全員の「島原の皆さまへ少しでもお見舞い」の運動が天に届いたのだと思います。

「旅行団を二つに割って宿泊」かと悲しい決断を迫られる場面もありましたが、最後には全クラス十一組がまと

まって無事修学旅行を終えることができたのでした。

石橋 佳代子 先生

担当教科：国語 (在籍期間：昭和五九年～平成十六年)

津高での思い出

過去はすべて忘却の彼方に消えさって過去を振り返ることはあまりしないのですが、久しぶりに昔のアルバムや文集などを鑑賞懐かしんでしまいました。

その中で、漕艇部一〇〇年の記事がありました。ボート部といった方が今の人にはなじみがあるかもしれませんが、漕艇部は津高校の最も伝統あるクラブで、一学期の審査後クラスマッチでは職員も参加で、レガッタ大会があり私も参加しました。その最初の顧問だった長谷川素近先生は津中に在籍し京都帝大を卒業後津中で教鞭をとられた方で、日中戦争に徴兵され、その後、体



俳句会も実施しました。「生徒らは軽く幅跳び飛んで秋」は池田民也先生の作品で、特選の一席に選ばれました。図書館に所属していた頃はいろいろな企画をしました。津高のOBの方々に資料など提供をお願いに行きますと、皆さんとても好意的で、惜しみなく協力をしてくださりました。

絵画展、生徒の作品展、先生の趣味の作品なども、亡くなられた駒田先生や鈴木茂先生等のご協力をいただき展示しました。鈴木先生は「教育は文化的でなければいけない」とよく話してくださいました。その言葉を真に理解

することはできなかったのですが、津高校の職場に赴任して少しずつ継続して積み重ねていくことで、なんとなくその意味が理解できるようになったと思います。二一世紀という非常に慌ただしい時代の中で、その言葉は意味を失い、津高校の姿も変容していったように思います。

八田 貴明 先生

(在籍期間：平成二二年～平成三十年)

津高校八年間の思い出

私は二〇一〇年～二〇一七年の間、担任(主に文系)として、社会科教員(主に日本史)、そして、硬式野球部の顧問として関わらせていただきました。それぞれでの濃厚な日々があり、多くの生徒、先生との出会いはわたしにとっ

てかけがえのないものとなっています。なかでも、硬式野球部での経験は今でも、ほんの二、三年前の出来事として、甦ってきています。「東大」と「甲子園」のスローガン(阿保先生の発案を掲げ、八年間で三人が実際に東大

へ合格したこと、徳島県の池田高校との練習試合をしたこと、愛媛県の松山商業高校へいき、初回に二〇点以上とられ、じいさんたち何しにきたんや！と言われたこと、滋賀県の北天津高校で相手打者の打球が、私のふくらはぎに当たってもんどりうったこと、打者の強烈な打球が投手の頭に当たり、救急搬送され緊急手術を受けたこと、野手の送球がこめかみに当たり、もう少しずれていたら失明したこと、中勢地区競技会で津高、津西をおさえて優勝したこと、夏の大会で一回戦で勝利したあと相手校からももらった干羽鶴を

当時の主将が闘病中の方へ届けて欲しいと、それを聞いて涙を流したことなく、それを聞いて涙を流したことなく、硬式野球部での経験の中でありえない練習試合について書きたいと思っています。



それは六月に毎年、京都の洛星高校へ遠征に行っていました。練習試合は一般に、二試合を行つわけですが、まず一試合目は、九回の表を終わって五、六点のリードで、おそろく勝ると私が慢心してしまい、普段、あまり投げない投手を起用したら、何と、逆転サヨナラ負けとなりました。相手をなめていたわけではありましたが、私自身の大きな反省として記憶に残っています。ここまでは、よくある話ですが、二試合目がすごかった。前半から、相手の一方的な展開となり、二〇点以上の差をつけられ、敗色濃厚となり、九回裏を迎えました。そこから怒涛の攻撃が始まり、一〇点以上の差をひっくり返して逆転サヨナラ勝ち！野球経験者ならわかると思いますが、こんなことが、自分の目の前で現実起こったことが今でも信じられません。

鳥肌が立つとは、まさにこのことです。硬式野球部の顧問として三〇年以上関わっていますが、今でもこの試合のことは、忘れられません。でも、それをやってのけたのは当時の生徒たちで、最後まであきらめない姿勢で全員でつないでいった。そして最高の結果を見せてもらったことにただ感謝しがあります。

なつかしい恩師の今の全文はこちら



〈あなたのこころ旅〉

さまざまな年代の同窓生から寄せられた「在学中の思い出」から、実行委員の「僕」と「私」がその場所の「昔」や「今」を取材し紹介する企画。四人の同窓生の思い出をホームページから抜粋し再編集しました。時代を超えた会報オリジナルマップを添えてご紹介しします。あなたの思い出と重なる場所がありますか？

青山 誠 (昭和28年卒) 思い出の場所



■津新町駅前にあった「津東宝映画劇場」

原節子の「青い山脈」を友人と一緒に観に行った。原節子の美しき、杉葉子のすがすがしさに圧倒された思い出が忘れられない。

■津城近くの「中日映画劇場」

イングリット・バーグマンの「汚名」を友人と一緒に観に行った。バーグマンの美しきと、映画の面白さが大きく印象に残っている。この映画館は洋画専用映画館だった。

私：昭和の映画とくれば、田川敏夫先生(昭和32年卒)でしょう、教えてもらいました。



中日映画館が九之門通町に建設され、映画も映った(昭和25年)。

田：なんやあ、呼んだか？

僕：昭和の津の映画館の変遷、歴史とかについて伺いたいのですが…津新町の駅前にあった「津東宝映画劇場」(後の津東映)と、お城近くにあった「中日映画劇場」って存じますか？
田：存じもなにも、中日映画劇場とかはワシもよお通ったもんや。「中日会館」にあった。あそこは洋画が多かったな。





私：夢遊病者みたいな人やな。

僕：僕らの世代はもっぱら「パール劇場」やったよな。夏休みとか、エアコンのある前の県立図書館(大谷町)に涼みがてら勉強に出かけたつもりが、ふと気づいたらパール劇場にいた。

僕：その後ジャスコ、さらに今では百五銀行の本店になっていってるんですよ。田：ワシが津高卒業した昭和三年頃が全盛で、単館系の映画館が津の中心部に九軒もあった。私：九軒も！ 田：昭和三十年代の娯楽という映画館はいろいろあったな、洋画、邦画、映画館によって特徴はあるけど、ここも盛況やったなあ。立ちっぱなしでも、それでも感激して観たもんや。

僕：学校の周辺には住宅や店舗が確かに増えているけど、それでも少しばかり西に歩けば田園地帯だし、昔と変わらぬ姿で長谷山と経ヶ峰を広々と見晴らせるよな。経ヶ峰と長谷山のコンビで、見る角度によって違った感じに見えるんよな。

蛙の声、正門とソテツ、青空に聳える長谷山・経ヶ峰
当時は津高の周辺は田圃に囲まれ、特に梅雨時には蛙の鳴き声で賑やかでした。また津高正門のどっしりとした構えとその前の立派なソテツの植木。そしてまた校歌にもある青空に映える長谷山と経ヶ峰の山々は、周辺の住宅が少なかつただけに懐かしい風景でした。



富田孝之輔(昭和35年卒) 思い出の光や音

僕：ああ、懐かしいなあ。パール劇場。デートのよつな、デートでないよつな、ほろ苦い思い出。私：たぶん勝手な思い込みでしょつよ。



私：コンビで漫才師みたい。どっちがボケで、どっちがツッコミ？経ヶ峰が助で、長谷山が花子？
僕：そう、そう、そんな感じ。経ヶ峰は後ろ盾という感じがするね。
私：これが、安濃とから見ると、親子のようにも見えたりね。
僕：長谷山は親離れしよつとしてる子どもみたいなね。
私：何と言つても無い平凡な山の形だけど、人にとって風景、景色とい

青山 誠さんの全文はこちら



茨木政彦(昭和51年卒) 思い出の場所 食欲編

このはそれ自体がかげがえのない思い出だもんね。
僕：おっ、もしかして「いい話」してる？
とこで学校の歴史を振り返って



部活の帰り道に新町通にあった「どさんこ」で食べた味噌ラーメンの美味しかったこと！近鉄東海ストアの「すがきや」、駅前ロータリーに面した「さりぼろ」も鉄板のお店でした。そして、名前は忘れましたが新町通りに「ふくとん」(だったのかな?) という店があり、一串10円(だったよな...)の串を食べ、ちょっとした大人気分を味わったりしていました。

富田孝之輔さんの全文はこちら



あらためて思うんだけど、正門前の「蘇鉄」だけは変わらないよな。
私：戦災や戦後の火災で残念ながら校舎は二度焼失しているのね。そして、伊勢湾台風でも他の樹木は倒れているというのに、正門前のあの「蘇鉄」だけはずーっと健気に大らかに生き永らえている。そのことには今さらながら驚くというか、感動するよな。
僕：そう、羽を広げた不死鳥のよう。津高のシンボルだよな。

僕：クラブの後は腹減るよねえ。私：それぞれに量販のオヤツ処あったよね。

僕：あった、あった、津高生の「空腹満たし処」ね。私：「どさんこ」「きりぼろ」「スガキヤ」は定番のラーメンスポットだったわね。

僕：「どさんこ」は新町通り沿い、三重野書店さんのならびだったよね。さらにその隣には「花」というお店もありました。昭和五十年前後のこ



と。いずれも今はないけど。

「スガキヤ」を懐かしむ声は多いね。茨木さんもよく行ったと言っていた。実際同級生との間でも「スガキヤ」は昔話で盛り上がる鉄板ネタなんだよね、今でも。

篠原 誠 (平成3年卒) 思い出「食欲編」「ボート部編」



美杉村(現津市美杉町)出身で、高校から下宿生活だったので、思い出は食べ物に関するものが多くなります。平日朝夜は下宿先で出たのですが、昼と土日はどこで食べるかが楽しみひとつ。私のお気に入りには津新町駅のそばにあった「たこじゅう」。豚玉か、お金に余裕があるときはモタン焼きをたべていました。とにかくボリューム

があつて、すごく楽しんでいたのを覚えてます。そして、友だちと一緒に行くときは「みゆき」というお好み焼き屋さんが多かったですね。

そして、もうひとつはボート部ですね。毎日、通った艇庫での部活もそうですが、夏休みは、美杉に帰省していたので、美杉から艇庫まで通いました。ある日、部室に行ってみると、だれもきていなくて、仕方がないので、一人乗りのシングルスクールというボートに乗って、練習(遊び)をしていたのですが、乗り慣れなくバランスが難しいシングルスクールで一人孤独に「沈」してしまい、汚れた岩田川につかっ

私：今は無き「近鉄東海ストア」(俗称「近スト」)の二階だったね。僕：「素」ラーメンに始まり、「玉子入り」「肉入り」、そして最上級が誰もがうらやむ「特製ラーメン」、今でいう「全部のせ」だったね。普段は「素」ラーメンでも、テストの出来がよかったときとか、何かいいことあったら肉入りとかね。まあ、小遣い次第だったけど。

私：ソフトクリームやクリームゼンざいとかもあったよね。

僕：はい、岩田川の河口にある津高ボート部の艇庫に「とつちやこ」。

ボート部顧問多羅尾先生：この艇庫は津高ボート部単独で利用しています。なので、岩田川でボート漕いでるのはうちの生徒たちだけです。

僕：艇庫は思ってた以上に広いし、ボ



僕：ところできあ、当時のスガキヤの情報も少し調べられないかなと思っ

茨木政彦さんの全文はこちら



超気持ちいい。僕もさつきからそんなこと思ってたところ。

多：つながってる気はしますね。こちらへどうぞ……(と、水面から少し高台にある艇庫の入り口まで案内頂

私：ワァー！水辺より格段に景色が広がりますねえ、いい眺め！……あつちは豊崎やし、伊勢湾の向こうには校歌にある「かのしまやま」も見えるやん！

僕：なるほど、ここに佇めば、海や、川や、空の音が聴こえてきますね。いやあ、ホント、今この瞬間、篠原さんの「こころの風景」に「とつちやこ」で感じがしたよ。ちょっと感激

多：河口に向けて漕ぐボートは長谷山や経ヶ峰も眺めながら漕いでます。だから山の声もね。

私：ところで、篠原さん作詞の「海の声」とかって、ボート部で眺めた景色とつながってるのかなあ？

僕：今日は天気が良いせいもあるけど、



篠原 誠さんの全文はこちら



95歳水彩画初個展を終えて

桑名

登(陳川昭和22年卒)



以前から絵が好きで、何時かは描いて見たいと思っていたのが、仲々機会が無く、何とか始めたのが七十歳を過ぎ、会社勤めを終えた時でした。

平成十二年春、津市主催の公民館講座「ふるさとスケッチ」でした。場所が中央公民館(NHK隣り・現森永ビル)といふ地の利もあり入講させて頂いたのが水彩画を始める第一歩でした。素人流でスケッチ等をしていたので格構は付いても仲々うまく行きませんでした。

その講座の二年目(平成十四年)に「伊賀街道を描く」と言う、スケッチツアーがあり、毎日曜日、津城から上野城迄、各宿場の街並、道しるべ等をお弁当持ち、現地集合、現地解散で約一年半掛けて仕上げました。良い勉強になり、今回の個展にも、参考出展させて頂きました。

これで面白くなり、前津中美術担当の林先生(通称ヤギさん)が画学生の進学の為の同好会(木旺会)を開かれ

ていたと言うグループがあることを知り入会(現在も在籍)、それと併せて安濃町公民館の絵画講座(パレットクラブ)にも入門、一応本格的に水彩画を習う様になりました。

それから約三五年……今回行き付けの画材屋さんの、ご主人に、九五歳の記念に個展の開催を勧められ、その気になって去る九月六日から十日迄の五日間、津市の画廊で、初個展を開きました。

今迄は自分の作品を文化祭や所属グ

じじやま

日置

喜美子(三重櫻昭和19年卒)



私は、大正十五年生まれ、只今九七歳の高齢となりました。

長い人生を振り返ってみますと、よくまあこの歳まで生かさせて頂いたと改めて感動しております。

私は津で生まれて、津で育った津大

ループの作品展で一、二枚しか一度に見ていないのを、約八十点を一堂に並べて見る機会を得て、二五年間の多少の進歩に吾々ら少々驚かされました。

その中でも気が付いたのは先輩、先生方から教えられた「緑色」の変化です。人物や建造物は季節的な色彩の変化は余りありませんが、四季の変化を表すのは風景の緑色でした。

そして色の明暗による絵の深み……奥行き等は二五年の精進の表れを感じられるのが驚きでした。

此の個展を開くのが決まった後に本年度の津高同窓会が催され、その連絡中に同窓会事務局役員の方々に協力をして頂き、三重テレビ、伊勢新聞の報

道を賜り有難うございました。そのお蔭で「自分も七十歳ですが、これから絵の勉強をします」と言う方が何人もお見えました。

個展開催中に、前葉津市長、飯田同窓会長始め関連の方々等多数のご来場を賜り、皆様に楽しんで頂き、成功裡に終わらせて頂きました。有難うございました。

飯田同窓会長が言われました。「同窓会は『三重櫻』の方の出席が無くなり『陳川』の方も少なくなって来ました。『陳川』の灯を消さないで下さい。」来年の同窓会にも元気で出席できる様、皆様も共に健康に留意して精進しましょう。

しかし昭和二十年の夏、津市も爆弾焼夷弾攻撃を受けて街の大半を焼失してしまいました。もちろん我が家も……。

幸いなことに母校三重県立津高等学校は戦災を免れましたが今も柳山町に在る古い校舎の長い塀や樹木を見るたび、何とも言えない感慨に浸ってしまうのです。

時は流れて戦後の混乱期のなか、結婚して三児の母となった私に思いがけない機会が訪れたのです。保母資格は取得していましたが、津市の保育所保母に採用されたのです。当時は未だ現在のよつに保育行政が十分に整っていない時代でもありました。若かった私は、日々子ども達と遊び歌い体を動かして疲れることを知りませんでした。

沢山の子どもの達の成長を助け見守って行く中で、未熟な私も多くのことを学び育てていただきました。何と言っても若芽のよつな子ども達は可愛くてすばらしい。お陰さまで当時の方々との交流は今も続いて幸せを頂いています。昭和六十年春、停年退職した私は領域が更に広がって行くような出来事に会いました。元々歌うことが大好きでしたが、やり残した夢を叶えようとして、年齢を顧みず津の女声合唱団に入団をしたのです。今迄知らなかった高度な合唱との出会いがどんなに嬉しかったことか。その御縁から「くらくら・トンボ」なる小グループが生まれ、その後二十年にも及ぶ合唱活動へとつながって行ったのです。

日本に生まれ育った童謡を地域の子ども達と一緒に歌い、津のお城ホールで開くコンサートはいつも盛会で皆さんに喜んで頂きました。団員の子ども達も参加して天使のような歌声でステージに花を添えてくれました。思い起こせばどれもこれも私にとつては宝物ばかりなのです。年を取ったから出て来ないことばかりではありません。老いることも成長のうちなんです。残りの人生もあとわずかになりました。辛い事や悲しいことも多々有りましたが、そんな事も忘れてしまっ程今の心境は楽しく穏やかなのです。私の長いじじやまき聞いてくださってありがとうございます。感謝を込めて……。

津人の一人として

吉田 壽 (昭和30年卒)



私には特に誇り得る業績も見当たりませんので、兼好法師の様に、思いっくままに書くことにします。

気づけば、津で生まれ、津で育ち、そして医学研修生やアメリカでの留学期間を除けば生涯津に住み続けている。太平洋戦争中は父が軍医として召集され、私達は幼稚園の頃から母の実家である津市岩田町の浅生眼科に預けられた。小学二年(昭和十九年十二月七日)に、今対策が急がれる東南海地震(マグニチュード7.9)が襲った。当時

有数の高さを誇った東洋紡績の煙突が根元から折れ、また江戸情緒が残る擬宝珠の旧岩田橋も落橋した。その時、弟(後に東北大学教授)が防空壕に逃げ込み笑ったことがあった。この防空壕は深さ地下1.5m、幅1.5m、長さ2m程で、壕の屋根は戸板の天井の上に約50cm程度の土盛をした簡単な造りであった。この防空壕が半年後に役に立った。小学三年の昭和二十年六月二十六日(朝八時頃から約二時間

半)、B29による津の空爆があった。三重工業(旧東洋紡績、現津球場二帯、当時戦闘機のプロペラや翼を製造)を中心に多量の爆弾が投下され一七四名(公表が犠牲になった。至近弾は私の避難した壕から約30m離れていた。空襲が終わって壕から出たら、朝の青空が巻き上がった砂塵により今にも落雷や夕立が始まりそんな真つ暗な空になっていった。その後、岐阜県の谷汲山に近い山村に疎開した。終戦の年末に津に戻ったが、塔世橋以南は焼野が原になっていた。

津高には昭和二十七年四月に入学し

思い出す 暉々の日々

井土 由利 (昭和34年卒)

野田暉行さんは、母校の創立百年記念讃歌「歴史をつぎて」と「そのよき名」の作曲のみならず、三重テレビ放送開局二十周年記念に委嘱された交響曲「三重讃歌」や、県内のいくつかの学校の校歌の作曲などで活躍することへの貢献の多い作曲家です。

今年六月初旬のある夜、野田さんの奥様から電話がありました。訃報でした。昨年九月十八日に、最後までお仕

た。感動したのは100mの直線コースがある広いグラウンドであった。高一二年には私は鈍足なので、運動会ではスピード競技を避け、久居を折り返すマラソンに参加して参加賞の学習ノートをゲットした。また高一では柔道部に在籍したが、練習不足で黒帯を締めるまでには届かなかった。高二ではキャンプファイヤーなどで盛り上がった文化祭の執行部に入り、映画興行部門を柴山君と担当した。大門劇場の「夜明け前」や中日劇場での「パリのアメリカ人」の映写は満席盛況であったが、その後の売り上げ金の収支が合わず、三回敷え直した。その後、役得も有り両館で二回無料の映画鑑賞が出来た。

この年の夏、甲子園出場が開校以来初めて叶えられた。甲子園では宇都宮

事をなざりながら静かに眠るように亡くなられたと。子供の頃の手術が原因のC型肝炎でした。現在八三歳一お元気で長生きしてください。まだまだだんごさんの作品が残されたことでしょう。その時に私を襲った喪失感は今もそのまま残っています。

野田さんとは、一学年に三クラスしかなく、しかも三年間クラス替えのない三重大学附属津中学校(当時)の同

工に二対一で残念ながら敗れた。同級の菊山、笹井、山崎君ら甲子園球児も今では故人となった。高三は受験準備の年だが、旧帝大以外の大学は毎日の授業を適当にこなせばなんとか合格出来た。なぜなら当時の大学進学率は30%に到らない時代であった。そして、昭和三十年三月新築完成の体育館で最初の卒業式が行われた。昭和三十年卒の卒業アルバムを開くと最初のページに当時の校長渡辺先生の「一鍬と雖ども我進むなり」の揮毫がある。

ところで医学は人々にグローバルな恩恵を与えるが、一方医療はローカルなものなので地域に密着して根付くことが大切だと思います。校長の「地道に一步先へ」の「送る言葉」は今も心に根付いています。(吉田クリニック)



じクラスで一緒に過ごしました。中学時代から、いつも五線紙を手にして、気に入った詩などを見つけると曲をつ

けたりしているような人でした。

その後、津高等学校へ進学。求めていたものが似ていたのか、同じクラブ「ロマンラン」友の会に入りました。そこでの尊敬していた先生や夢中で講演を聴いた良い仲間達との出会いは、高校三年間を豊かに色取ってくれました。中庭のクローバーの上でいろいろな事を話し合い議論しあい、さまざまなことを学びました。ちなみに私の夫はそのクラブの六年先輩にあたる人です。

もつづいぶん前の事になりますが、二〇〇〇年の秋、名古屋にある能楽堂で、野田さん作曲の新作能の公演がありました。高山右近の生涯を描いたものでした。クリシタン大名として有名な右近は、戦国末期に摂津に生まれ、少年時代に洗礼を受けました。その天才的な武功により、信長や秀吉に重用されましたが、秀吉のバテレン追放令が出ると、大名の地位を捨てて信仰を守りました。江戸時代に至って家康の禁教令によりついにマニラに追放され、そこで客死しました。

会場は満席で、舞台は美しく、私は何度も涙しました。感激した熱い気持ちで帰途につこうとした時、出口近くで思いがけずやはり同じ中学校の同じクラスで一緒に過ごした伊藤宏さんと出会いました。伊藤さんは四日市で高校の先生をなさりながら、ずっと戦争の絵を描き続けておられる画家です。懐かしい気持ちで一杯になった私達は一緒

に楽屋をお訪ねしました。野田さんは若々しくお元気そうで、ぴかぴか輝いておられました。そこで奥様とも初めてお目にかかることが出来ました。

今、東京では、野田さんの初めての大作「大仏開眼」の公演を実現させようとお弟子さんや親しかった人達で準備が進められています。野田さんが作曲を始められた時、東日本大震災が起

機会を得て人は生まれ変わる

秦

政 (昭和35年卒)



こりました。亡くなった大勢の方々の霊を弔う祈りがもった作品です。きっかけは平山郁夫さんの「大仏開眼」を描いた絵であり、台本は能「高山右近」と同じく加賀乙彦さんです。

野田さんの最後の大作「大仏開眼」が、いつかあるさとの津のホールで公演されることを切に願ってやみません。は近寄るな。『彼らとは関わるな』との露骨な差別感があり、そうした友人と親しかった私は子供なりに親たちの言い分に強い違和感を感じていました。

昭和十六年久居で生を受け昭和三三年小学校に入学、津高卒業は昭和三五年でした。小学校入学の頃は敗戦直後で、戦地から戻られた傷痍軍人の方達が支援を求め街角に立っている姿が散見されるそんな時代でした。クラスには障がいのある友人三名のほか、隣国から移住しされてきた家族や被差別地域から通う友人もいました。親たちは『あそこ

社会人になり二五年が過ぎた時、勤務先企業で障がい者を雇用する会社設立と経営の命を受けました。障がい者マネジメントの経験が無かったため不安でしたが、障がい当事者と触れ合う中で不安は期待に変わりました。彼ら一人一人の豊かな可能性と高い成長意欲に触れ【やりたかったのはこの仕事だった！】と子供の頃を思い出したのです。子供なりに抱いていた世の中の不条理。障がい者や国籍の違う人たちがそれを理由に挑戦する機会を制限されたり処遇面の不利益を見てきたので、自分に関わることでその考え方を根っこから変えたいと思ったのです。

十二年の経験を通して障がい者の雇用・就労について本当の気づきがありました。それは企業の障がい者雇用は本来【国が定める法律があるから】が目的ではなく、少子化が進む中で必要な労働力確保に向け障がい者を働き手として迎え、育ててゆくことだと思えたのです。

平成十三年に経営を離れ、個人の立場で【障がい者雇用のあるべき姿】をテーマに講演活動を行い多くの賛同を得ましたが、企業の雇用姿勢を変えるまでには至りませんでした。背景には国が定める雇用率を達成することのみが企業の喫緊の課題にあったからです。とりあえず障害者手帳を持つ人なら、即戦力の人ならという風潮が広がってゆきました。結果、対象から外されたのが精神障がいのある人たちでした。

故郷に赴任して

中村

さとみ (昭和59年卒)



本年二月、転勤で、久しぶりに津に戻ってきました。私の職業は裁判官で、

雇用事例の少なさや精神障害という言葉に多くの企業が戸惑ったのです。この風潮の中気づきました。私が本当にやりたかったのは支援を必要としている人の側に立ちたいということ。根っから人が好き、というより人が不幸でいる姿を見過ごしにできない性分に気づいたのです。そこで企業支援の仕事に就き、障がい当事者に寄り添う側に方向転換しました。それが今京都の西陣地区で営む小さなカフェ【ひとつぶの種】です。店は週二日、午後四〜五時間のみの営業ですから収益はもとより期待していません。カフェにはちょっとしたつまづきで自信を失い、周りとの交流に負い目を感じて社会から孤立している人たちがふらっと訪ねて来ます。カフェ側が何かをするわけではありません。仲間と一緒に時間を

過ごす中、自然に生まれた会話から少しずつ彼ら一人一人の自己肯定感が高まり、ありのままの自分で良いんだとの気づきに至ります。前を向いて一歩踏み出す勇気が湧いてきます。他者の評価が気になり、言葉に出すことを逡巡していた人が能弁になってゆきます。そこには何を言っても受け入れてもらえる安心感があるからです。自然発生的に生まれた仲間同士の話し合いや学びの場も形成されてきました。お互いを信じリスペクトする共助の自立が始まってきたのです。こつこつとた姿を見るとき彼らに必要なものは、学び経験するための少しの時間的ゆとりと周囲の理解と支援・仲間同士の共感なのだ感じます。機会を得て人が元気になるってゆく姿を横で見られる幸せを満喫しています。しんでいる人も多いのではないかと思います。他方、転任地が故郷であるということには、何にも代えがたい感慨深いものがあります。私の場合、就職して故郷を離れ、家庭を持って、生活の本拠地が関東地方になりました。しかし、その後の裁判官人生において、有り難いことに三回も、故郷近くに赴任する機会がありました。一回目は、子供らがまだ保育園に通う年齢だった頃。四日市の裁判所に赴任することになり、二人の子供を連れて津の実家に住まわせてもらうことに

しました。実家の両親は、孫らを歓迎してくれて、保育園のバスで帰ってくる孫らを迎えに行き、私が帰宅するまで遊び相手をし、夕食を食べさせてくれました。四日市での勤務は四年間で、裁判官になって十年目前後、やっと一人前になるかどうかという時期です。両親に子供らの面倒を見てもらったお

陰で、とても助かりましたが、この間に親の白髪がずいぶん増えてしまったことが忘れられません。二回目は、裁判官になって二五年目前後の頃、名古屋の裁判所に勤務しました。子供らも大きくなり、今度は単身赴任でしたが、この頃になると親の介護が心配な状況で、また実家に住ん

で、名古屋まで通うことにしました。裁判官としては、部を総括する立場となり、仕事量も多く、大変な時期ではありましたが、今度は自身が親の面倒を少しでも見ることができればという気持ちで過ごしました。母親が他界する前の一年余り、実家で一緒に過ごすことができたことは大変有り難いこと

でした。三回目が今回、津の裁判所への所長としての赴任です。津への赴任があるような気がするが根拠も無く言っていた父親は、今回の赴任直前に他界しました。恩返しのできる親がいなかったは悲しいのですが、今回、津に初めて一人で住むことになって、改めて故

郷の居心地の良さを感じています。津新町駅から津高までの道を歩いてみると、校門前の変わらない風景、西に広がる田んぼと布引の山々を見て、とても懐かしい気持ちがかみ上げました。恩師や知人に会う機会もあり、昔話に花を咲かせつつ、来し方行く末を思う今日この頃です。

◆有造塾が開催されました!

日時 令和五年九月二十九日(金)

場所 津高等学校 体育館

〈演題〉「原子の世界とテクノロジー」

〈講師〉幾原雄一氏(昭和52年卒)

東京大学大学院工学系研究科総合研究機構・教授

キャンパスツアーと有造塾の講義

1年前 垣沙恵

私は東大キャンパスツアーと有造塾の二度、幾原教授の講義を受けさせていただきました。どちらの講義も楽しく、原子の凄さを肌で実感することができました。

私が講義のなかで一番印象に残っているのは原子の動き方や配列を少し変えるだけで、材料の特性が大きく変わるという話です。今は、スマートフォンなどに内蔵されているリチウムイオ



ン電池の劣化の原因となるイオンの動きを改善することで、電池の持ちを良くする研究が行われているそうです。肉眼では見えないので小さな粒子一つ一つの変化が私達の使う製品に大きく影響しているということを実感し、とても感動しました。

また、第一原理計算についての話も印象的でした。この計算方法は、原子の特徴から材料を作るときに用いられ

る計算方法を指します。私は計算を使って物を作り上げることができるということを初めて知ってとても驚きました。そして、一つの新しい材料を作るためには多くの作業と工程があるのだと気づき、工学は本当に多くの人の手によって成り立っているのだと感じました。

私は工学系の学部への進学を考えていますが、教授の講義を聞くまで原子とはどういふものなのか、原子の研究がどのように社会の役立つかよくわかっていませんでした。でも、講義や東大キャンパスツアーでの体験を通して、原子のことや研究内容を聞かせていただき、原子はとても興味深いものだと思つようになりました。

教授は講義の最後に「Seeing is believing to SEING IS CREATING」という言葉を教えてくれました。これは「百聞は一見にしかず」と似たような意味を持つ言葉だそうです。私達はこれから進路など自分で何かを選択していく機会が増え、そのときには自分が経験したこと、実際に見たり聞

いたりした経験が大きな助けになると思います。だから教授の言葉のように、これからは知りたいと思つたことは積極的に追求し、体験していこうと思つています。お忙しい中、ありがとうございました。



津高同窓会副会長就任のご挨拶

副会長就任のご挨拶

落合 賢治 (昭和61年卒)



本年度より津高同窓会副会長を拝命しました落合賢治です。どうぞよろしくお願ひ致します。私はコロナ禍になる前の令和元年の同窓会の幹事学年で代表幹事を務めさせていただきました、当時の役員の方々の意向もあり同窓会会場を今までの二会場から

長もさせて頂きながら、またこちら津高卒業生の輪が広まっていくなのだなと思い、同窓生の絆の大切さを感じ、同窓会の益々の発展のお手伝いができることを嬉しく思っています。

私の大好きだった昭和51年卒の元副会長である故三藤治喜先輩が亡くなる一年程前に私の自宅にて「落合！津高の同窓会役員って誇り高きすごい役職やぞ！お前も精進しろよ！」と言われたことを思い出します。三藤先輩にはおよびませんが、一番年下の役員として、先輩方と後輩たちがさらに絆がる同窓会になるよう目指して頑張りますのでどうぞよろしくお願ひ致します。

(丸栄木材株式会社 常務取締役)

新生！津高東京同窓会の出発

津高東京同窓会会長就任のご挨拶

西村 修一 (昭和49年卒)



二年前の二〇二一年、コロナ禍の中で、前会長の田村正衛様より任を引き継ぎました。田村様には、八年間という長きに亘り津高東京同窓会

を積極的に牽引され、一回り大きな会に成長させて頂き、本当に感謝の念に堪えません。その後任が務まるのか、不安要素以外何もありませんでしたが、事務局に支えられ走り始めました。

結局四年振りに新しく生まれ変わった総会・親睦パーティーを本年開催できました。トライ&エラーをモットーに、今回の運営は、デジタル技術を駆使し

てライブ映像をもとにわかりやすさを打ち出し、スクリーンでの説明を増やし、経費節減にも貢献しました。

今後は、会員の親睦を基軸に置くことは勿論、会員拡大のための若手の会の発足、更にデジタル機器を活用した臨場感のある総会、SNSの活用検討、協賛を募った楽しい企画津高一〇〇周年に向けたイベント準備など、実現には課題山積ですが、とにかく前向きに取り組んでいきます。それが、将来の同窓会の姿に繋がっていくと思っています。微力ながら努力して参ります。

津高同窓会会計監査就任のご挨拶

就任のご挨拶

平野 孝幸 (昭和56年卒)



この度、津高同窓会の会計監査に就任させていただきましたこととなります。同窓会は昭和五十六年に卒業して以来、ほとんど出席することもなく過ごしておりました。平成二十六年の全体同窓会の幹事年に、当時、津高にて教師をしていた友人から「学校に近い処に住んどるし、職業柄、時間の都合も付くんやろ。実行委員会には仲の良かった連中もおる

から来いぞ。」と声をかけられて、参加することとなりました。その後は、同窓会とは付かず離れず接してまいりました。しかし、誘ってくれた友人が令和二年にこの世を去り、コロナ禍ということもあり、足が遠のいてしまいました。

今年に入って、同窓会としても税理士としても大先輩である方より、前任者が退任することとなったため、就任の要請を頂きました。お声をかけていただいたのも、また、ご縁が繋がったのだと思い直し、引き受けさせて頂きました。微力ながら誠心誠意、務めてまいりますので、皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

津高創立一四〇周年募金寄付者御芳名

(卒年順 敬称略)

ご協力ありがとうございました。

会報五八号に続き、令和三年七月以降、ご寄付いただきました方々のご芳名を掲載させていただきます。お礼申し上げます。(二六五名)

客員

辻成尚、北村治郎、木村満利、阪村幸代、西田修一 (昭和12年卒) 故池村良夫

(昭和17年卒) 戸澤又千
 (昭和21年卒) 林久利
 (昭和22年卒) 池村春樹、玉置和範
 (昭和23年卒) 斎藤正和、森本清
 (昭和24年卒) 上野英二、西川文夫
 宮野修、澤田啓司、土田隆司

三重桜

(昭和13年卒) 故高梨調子
 (昭和15年卒) 伊藤充子
 (昭和17年卒) 藤田あい子
 (昭和19年卒) 植田淑子
 (昭和20年卒) 今井登美子、川出房子
 (昭和20(4)年卒) 岩崎禮子、川北美代子、相樂貞子
 (昭和23年卒) 黒宮信子、川北綾子
 佐久間かず子、田中ひさ

(昭和24年卒) 荒井悦子、上月栄子、鈴木淑子、松原佳子
 (昭和21年入) 金佳子

津高

(昭和26年卒) 野田美江子、澤路保子、故薄井良、坂一彦、水谷愛子、渡邊昌弘
 (昭和27年卒) 金児清之、横井妙子、池村久子、小栗美子、辻岡町子、仲重信、箕田健生
 (昭和28年卒) 数内彦一(旧職)、青山誠、宇河英崇、宇河ミヨ子、栗田つた、近藤康子、澤路啓子、中尾哲也、橋本紀子、故松嶋静子、木村継子、後久千枝子、小菅健司、小山洋子、森川公子

(昭和29年卒) 大西かおる、河原崎栄子、津田克也、堀元昭、井出君子、紀平了、後藤美子、辻頼夫、永野仁施、別所治子
 (昭和30年卒) 國分美枝、佐藤守男、野垣内麗子、前田公平、麻生寛子、伊藤雅子、内山宏洋、神田章、木下研一、福島慶義、光前禮子、宮脇雅子、山根由里

(昭和31年卒) 藤岡美也子、大橋敬義、青木俊作、伊藤孝憲、長田順子、西井章子、平石純子、別所咲枝、松家敦子、山際卓巳
 (昭和32年卒) 内田勝久、大西豊子、奥野隆、川端三郎、上田美保子、梅本貞治、大崎武、加藤栄、佐脇喜久子、田岡裕子、二宮君子、橋本直捷、水谷滋子、村田善之

(昭和33年卒) 奥田務、中尾真也、石原英雄、石崎京、市橋たね子、竹田三重子、刀根寛、中川禎勝、中野洋子、西藤由美、野間淳、原田和子、古市百合子、山田善久、山田潔子
 (昭和34年卒) 堀川幸夫、川畑光世、杉野節子、森尾邦江、潤田久志、小黒源紀、益川典子

(昭和35年卒) 佐々木和夫、服部重彦、太田克子、加藤哲也、黒石正子、高倉衛、林朋子、藤田一義、三輪征夫、伊藤節子、岩佐則武、宇佐美公子、菊山功嗣、並河健三、馬場佐世子、松浦功
 (昭和36年卒) 荒川猛、大川純子、田村美智子、故中尾修也、廣部肇、堀田宣彌、宮村昊、森柳子、赤塚敬一、

浅田剛夫、池山雅也、鎌田源道、黒澤英夫、國富寛子、坂本是子、佐野孝子、澤田志げ子、津坂洋子、中里牧人、久岡克美(旧職)、松田敏通
 (昭和37年卒) 青木健、小津栄与、谷洋一、森島正宏、山本孝夫、青木宙、赤塚高之、竹田明子、刀根照美、浜口栄治、水野周子、美宅正忠、山本盛義
 (昭和38年卒) 笠井直哉、藤田重光、森川正樹、山中俊雄、飯田恭子、岡田幸宣、岡村禎夫、小畑仁、杉浦幸生、谷口孝行、坪井清美、長谷部夏彦、増田敏雄、望月ひさ子

(昭和39年卒) 故川田節子、藤内隆志、渥美正道、河戸克泰、川村正人、小菅弘夫、後藤輝人、高田裕美、田中茂子、谷川祐子、西村淑子、西村正克、村林雅子
 (昭和40年卒) 采翠純子、渡邊智恵子、内田浩二、川喜田久、古池敏彦、小坂隆、中桐千枝、山本倫子
 (昭和41年卒) 井上紀代子、奥田圭一、落合敏、小菅美知子、藤本道夫、山口秋吉、脇田允夫

(昭和42年卒) 大塚真美、江藤哲夫、尾崎むつ子、中組勇次、浜口恵、丸山隆司、伊藤修三、宇佐美むつ子、岸田民樹、小西和頼、近藤卓二、妹尾健次郎、辻義則、西尾仁之、西出裕次、渡瀬悟、渡瀬てる子
 (昭和43年卒) 玉井金五、岡本公秀、金丸直明、田中洋、谷口和子、松尾みち子
 (昭和44年卒) 林文子、菱井光生、中

山正隆、赤塚康代、岡森佳男、桜井光治、中山秀樹、安田やよひ、柳田敏子、吉川澄澄
 (昭和45年卒) 服部信一郎、打田恵子、小林仕朗、谷口晴彦、菱井澄子、平田和吉、宮崎けい子、梁井とし子
 (昭和46年卒) 岡孝子、竹島英介、藤田彰男、伊藤馨、佐野英一、谷口万里
 (昭和47年卒) 伊藤宏規、今北理、小川初子(旧職)、竹内優美子、前川孝
 (昭和48年卒) 稲垣悟、土性明、山本紀昭
 (昭和49年卒) 小畑良洋、山崎直子、岩田久嗣、小河健彦、菊永敏之、小菅一弘、永戸泉、羽田正敏、村田憲彦、関岡啓子、武田俊一、西村修一、茂利昌弘
 (昭和50年卒) 伊藤誠、小林正美、野田学、東川有子
 (昭和51年卒) 高瀬雅伸、長谷川正也、廣瀬浩一、大島仁、大杉和司、駒田健小山朋子、豊田ますみ、中山慎司、藤原由香、松田克己
 (昭和52年卒) 乙部辰良、近藤直哉、榊原いづみ、田中一彦、尾関健一、木野旬、坂幹雄、下條勇治、中川信之
 (昭和53年卒) 尾崎靖、古寄智志
 (昭和55年卒) 川原林義弘、川原林裕美、高橋正浩、山口恭平
 (昭和56年卒) 後藤清、金丸敦子、辻村恭江、和田浩
 (昭和57年卒) 岡聖子、佐藤英樹、堀田祐治、武藤あゆみ
 (昭和58年卒) 平田稔

(昭和59年卒) 日沖明子、浅生伸之、打田一馬、増地伸之、山際晋作、山下明彦
 (昭和60年卒) 西野香織、奥山真司、笹山武志
 (昭和61年卒) 稲垣英樹、辻健次、浦出雅人
 (昭和62年卒) 吉川武
 (平成元年卒) 林克之、西野千春
 (平成2年卒) 佐伯剛
 (平成3年卒) 柴田栄一
 (平成4年卒) 秋和忍
 (平成5年卒) 三谷恭子
 (平成6年卒) 梅原暁子
 (平成12年卒) 薄井成夫
 (平成16年卒) 村上裕子
 (平成17年卒) 仲里陽一
 (平成18年卒) 薄井健吾、薄井麗歌、木野紘美、菱井康生
 (平成28年卒) 奥田義勝、内藤友紀
 (平成29年卒) 印南七海
 (平成30年卒) 印南幸介
 (令和3年卒) 印南慶太、山中翠



進路状況

進路指導部主事 大丸 薫

平素より本校の教育活動、進路指導にご理解ご協力をいただきまして、誠にありがとうございます。心より感謝申し上げます。

さて、今年の五月より新型コロナウイルス感染症が5類感染症となり、それまで中止・延期・自粛していた本校の教育活動も徐々にコロナ禍以前のころへと戻りつつあります。校外研修においては、毎年恒例であった「東大キャンパスツアー」をはじめ、大学教授による研究紹介、各分野で活躍されている卒業生との交流会など、たくさんの方の企画を再開し始めました。また一方で、

生徒たちの日々の学びに関しては、コロナ禍に整備されたICT環境と三重県が進めている「生徒一人一台端末を活用した学習」の導入によりコロナ禍以前よりもバージョンアップされた教育環境で学んでいます。

今後も生徒の希望する進路が実現するよう教職員も一丸となって支援して参ります。同窓会の皆様には、今後とも後輩たちに手厚いご支援、ご指導を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

各地で同窓会開催

東京同窓会

本年度の津高東京同窓会総会・懇親パーティーは、四年振りの開催となり、九月十六日(土)に新会場のアルカディア市ヶ谷(私学会館)で行われました(輪番幹事: 昭和48年・60年卒)。津高同窓会の飯田俊司会長より、多気町の「VISION」という総合文化レジャー施設のご紹介の後、引き続き声高らかに乾杯のご発声を頂き懇親会が始まりました。また、辻成尚校長先生からのご挨拶、恩師の牛尾俊治、上村和弘先生のご紹介をしました。そして、今回のイベントは記念講演で、「炭酸で若く美しく健康に」をテーマに実演を交えながら前田眞治先生(48年卒)のトークで楽しいひと時を過ごしました。



新会員として、酒匂陸さん、山村朋さん、林太陽さんらから挨拶がありました。年度幹事の神戸洋史さん(49年卒)の

名古屋同窓会

四年ぶり、「津高名古屋同窓会」盛大に開催される。



決意表明がありました。

最後に、前田眞理子様(48年卒)の指揮により全員で校歌を合唱し、来年度の再会を期してお開きとなりました。



大阪同窓会

こち意見が飛び交う興奮でした。最後は、陳川、三重櫻、津高の校歌を声高々と歌い、来年の再会を約束しました。(津高名古屋同窓会会長 高北幸矢)



十月十四日土曜日、午前十一時より、レストランガス燈(名古屋市中種区今池/今池ガスビル)にて、「令和五年度津高名古屋同窓会」が盛大に開催されました。本部飯田俊司会長、辻成尚学校長ら来賓六名をはじめ、出席者は一一七名で、レストランは満員となりました。

名古屋同窓会会長からコロナ禍におけるこの四年間の報告を中心に、総会を滞りなく済ませることができました。恒例の卒業生によるミニ講演会は、津軽三味線で大活躍の駒田早代さん(平成30年卒)。激しいバチの演奏、ハリのある歌声による民謡で会場を魅了しました。

懇談会は、九六歳の別所嘉郎さん(陳川昭和19年卒)の乾杯で華やかに始まり、食事を楽しみながら旧交を温めました。津高クイズでは、三択の問題がなかなかの難問で、それ故にあち

第五十四回津高大阪同窓会は季節外れの夏に見舞われた十一月五日に都シティ大阪天王寺にて開催されました。三連休中であったためか、出席者は百名をきって九九名でしたが、外気に負けないくらいの熱気に溢れた賑やかな会となりました。懇親会に先立って行われた総会では岸野文郎大阪同窓会会長の挨拶に続き飯田俊司本部同窓会会長からご挨拶を頂戴しました。辻成尚校長からは津高の近況を報告して戴き、さらに恩師を代表して眞崎敏明先生からもご挨拶を頂戴しました。中山事務局長からの会務報告の後、



岸野会長より会員講演を賜りました。「VR、生成AIを中心としたデジタル情報社会の展望(会長の自己紹介を兼ねて)」の演題で、自身の研究歴に沿ってバーチャル・リアリティーの黎明から最新の動向までを解説して戴きました。

アトラクションは40年卒の川喜田久さん(Gt.)と河合「喜彦さん」(Vo.)のグループ「喜寿喜寿」による演奏に合わせて皆で歌い会場が一つになりました。

また現役の大学生三名の参加があり、とかく高齢化が進む同窓会に新鮮な風を吹き込んでくれました。

毎年同窓会を開催できることが必ずしもあたり前ではないことをコロナ禍が私たちに教えてくれました。来年もまた元気で皆が集えるように願って四年ぶりの同窓会は閉会となりました。

横田若生(昭和54年卒)

物故者

(2023年10月末日現在) (敬称略)

140周年名簿発行(正誤表発送)以降のお知らせとなります。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

| | | | |
|------------------|---------------|-----------------|---------------|
| 旧職 林 茂 典 | 昭15 速水(小笹原)清子 | 昭27 中 尾 哲 也 | 昭36 立松(藤川)弘子 |
| 旧職 水 谷 四 郎 | 昭15 山本(中林)一子 | 昭27 波多野(波多野)八重子 | 昭36 中 尾 修 也 |
| 旧職 吉 川 俊 三 | 昭16 松浦(宮村)きよ子 | 昭28 喜 田 治 男 | 昭36 西 井 進 一 |
| 現職 森 下 憲 | 昭17 朝熊(桑内)ひさ子 | 昭28 笹野(桑原)畿代 | 昭37 川 村 昭 弘 |
| 現職 大 森 辰 生 | 昭17 阿部(村山)幸子 | 昭28 富 島 照 男 | 昭37 島村(角谷)正子 |
| 旧職(27) 落合(今村)ひで子 | 昭17 高 松 均 枝 | 昭28 中井(藤井)弘子 | 昭37 中 根 幹 夫 |
| 陳川昭15 山下(中川)義重 | 昭17 藤 田 伊 勢 子 | 昭28 中 村 正 文 | 昭37 服 部 忠 信 |
| 昭17 山中(岩崎) 寛 | 昭18 大岩(稲野)みづほ | 昭28 松島(豊田)右子 | 昭37 細 野 英 之 |
| 昭19 倉 田 恒 生 | 昭18 丹 羽 しげ子 | 昭28 山下(小住)三千代 | 昭37 山 野 紘 一 |
| 昭19 野 呂 健 | 昭18 花谷(横井) 知 | 昭29 小 野 允 也 | 昭38 川村(中西)麒一郎 |
| 昭19 若 林 正 美 | 昭19 小松(大沢)育子 | 昭29 吉川(池田) 中 | 昭38 河 野 正 美 |
| 昭20 川原田 昭 | 昭19 深見(奥山)美代子 | 昭29 西 脇 敏 夫 | 昭38 近 藤 功 |
| 昭20 西 川 寛 | 昭19 山 中(鏡) 和 | 昭31 伊 藤 良 治 | 昭38 高 根 胤 満 |
| 昭20 松 島 二 良 | 昭20 岡 林(林)禮子 | 昭31 大 橋 克 己 | 昭38 中 嶋 昭 雄 |
| 昭20 葉 昂 | 昭20 北澤(亀井)美津子 | 昭31 小 田 宏 雄 | 昭38 堀 才 大 |
| 昭20④田 中 義 朗 | 昭20 前 田 阜 月 | 昭31 久 保 薫 | 昭38 吉 沢 嘉 浩 |
| 昭20④中 野 清 弘 | 昭20 増田(中橋) 文 | 昭31 浜 口 幸 雄 | 昭39 飯田(佐竹)美津子 |
| 昭20④藤 村 辰 夫 | 昭20④後藤(永尾)悠紀子 | 昭31 比良多 道 晃 | 昭39 川田(大川)節子 |
| 昭22 清 水 一 男 | 昭20④野垣内(垣野)愛子 | 昭31 堀 内 田 鶴 | 昭39 神 田 信 晴 |
| 昭22 辻 武 | 昭20④山川(宮出)裕恵 | 昭32 田 原 秀 穂 | 昭39 杉 崎 護 |
| 昭22 長 岡 暉 | 昭20④米倉(橋爪)光子 | 昭32 日根野(畑中)陽子 | 昭39 杉崎(安田)清子 |
| 昭22 堀(加藤)高 義 | 昭22 荒 木 妙 子 | 昭32 村 田 潤 | 昭39 花 實 龍 雄 |
| 昭22 吉 岡 眞治郎 | 昭22 松 島 葉 子 | 昭33 萩 野 卓 次 | 昭42 中 橋 卓 嗣 |
| 昭23 伊 藤 高 華 | 昭23 伊藤(森田)れい子 | 昭34 愛敬(野嶋) 紘 | 昭42 前 川 準 一 |
| 昭23 堀 川 泰 義 | 昭23 岡(大西)武 子 | 昭34 赤 塚 開 二 | 昭43 川 島 源 大 |
| 昭23 矢 野 禮 | 昭23 高山(伊藤)美知子 | 昭34 市川(野村)紀子 | 昭43 鳥 前 誠 |
| 昭24 石 田 明 | 昭23 桜 井 玲 子 | 昭34 伊 藤 弘 道 | 昭43 鳴 神 茂 |
| 昭24 北 浦 昭 徳 | 昭21入草深(榊原)玲子 | 昭34 印 南 力 | 昭43 西 川 満 |
| 昭24 田 村 憲 司 | 津高昭24 井 上 和 夫 | 昭34 奥 山 憲 史 | 昭43 武 藤 和 信 |
| 昭20入野 本 重 男 | 昭24 島田(清水)静子 | 昭34 小野寺(山本)貴子 | 昭43 村 上 壽 |
| 三重桜昭6 茂貫(木村)千枝子 | 昭25 福 島 弘 太 郎 | 昭34 川村(松田)典子 | 昭43 山 田 俊 郎 |
| 昭8 岩間(田所)ほづま | 昭26 薄井(渡辺) 良 | 昭34 工 藤 正 英 | 昭43 渡 邊 庄 司 |
| 昭8 三井(中西)百合子 | 昭26 加藤(高楠)みどり | 昭34 洲崎(金子)磨知恵 | 昭44 田村(増岡)章子 |
| 昭11 中田(中里)たづ子 | 昭26 黒川(小林)悦子 | 昭34 千田(竹内)光男 | 昭44 別 所 孝 夫 |
| 昭12 中里(前田)千鶴子 | 昭26 後藤(松浦)貞子 | 昭34 野 田 暉 行 | 昭44 宮 田 拓 |
| 昭13 金児(村井) 可 | 昭26 西川(大原)信子 | 昭34 広 部 正 道 | 昭46 宇 賀 賢 秀 |
| 昭13 高梨(国持)調子 | 昭26 松 岡 宏 | 昭34 藤田(井戸) 愛 | 昭48 山 岸 京 子 |
| 昭14 杉(青山)信 子 | 昭26 渡邊(後藤)昌弘 | 昭34 丸山(吉川)紀久子 | 昭51 服 部 匡 |
| 昭14 安富(坂口)とき | 昭26家木村(宮崎)定子 | 昭35 池 田 威 | 昭55 小 柴 信 之 |
| 昭15 伊 藤 千 鶴 子 | 昭27 笠井(小菅)せき子 | 昭35 石黒(清住)郁子 | 昭56 芥藤(原田)浩子 |
| 昭15 高 階(林) 秋 | 昭27 坂元(別所)幸子 | 昭35 黒石(細井)正子 | 平元 川 田 節 大 |
| 昭15 中尾(笠井)美代子 | 昭27 滋 野 正 明 | 昭35 長谷川(飯田)まさゑ | 平7 中 西 満 |



浦田 敏 寿(平成11年卒)

令和五年度陳川・三重櫻・津高同窓会総会・パーティーが『環くめぐる』をテーマに、令和五年六月四日、メッセウイング・みえにて五八八名の方々にご参加いただき開催されました。ご承知の通りコロナ感染症の影響で、同窓会総会は三年連続で延期され、四年越しの開催となりました。例年八月に開催してありましたが、猛暑を避けるため今回から六月に変更となりました。梅雨時の雨や台風を心配していたものの、当日は好天に恵まれ、スタッフ一同胸を撫で下ろしました。同窓会総会では、物故者への黙祷、

お知らせ

令和六年度 総会・パーティー

日時 令和六年六月二十二日(土)

正午より

場所 メッセウイング・みえ

テーマ 「縁—同窓会は人との

ご縁が つながる 場所」

担当学年幹事

昭和63年卒(代表 松本 哲治)

平成12年卒(代表 中村 英仁)

令和五年度総会・パーティーを終えて

令和六年度総会・パーティーのご案内

実行委員長 松本 哲治(昭和63年卒)

令和六年度津高同窓会総会・パーティーは、昭和63年卒と平成12年卒が担当いたします。まずは、前回幹事学年のみなさんが、足かけ五年にわたって、ご準備に当たられたことに篤く御礼を申し上げます。

同窓会が、人とのご縁が つながる場所であることは、自明のことですが、その活動は、この数年、実質的には停止を強いられて来ました。来生こそは、

今回は、令和元年、令和五年に続いて、メッセウイング・みえで、一堂に会しての開催となります。担当学年一同、精一杯のおもてなしを心がけます。皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

飯田同窓会長、辻校長のご挨拶、代議員会報告等が行われ、続くパーティーではコロナ感染症対策として、前回のオードブル形式での食事提供ではなく、東洋軒やはな房等、当地有名店五社のオリジナル弁当をお選びいただく形としました。またステージでは共に昭和62年卒で、オペラ歌手中野陽登美さんによる歌唱と、健康科学士奥井典生さんによる健康講座でお楽しみいただき、最後は校歌斉唱を行いました。

コロナの影響が未だ残る中、これまでと異なる点多く、皆様にはご迷惑をお掛けした点もあったかとは存じますが、盛会裏に終了出来ましたことを厚く御礼申し上げます。



事務局 だより

○会報五九号をお届けします。今回は二万六千部の発行です。

○住所異動の際は、卒年・名前・新住所をお書きの上、馨書・FAX・メールのいずれかでお知らせください。○令和三年夏に、ホームページのリニューアルをいたしました。

最新情報は、是非、ホームページをご覧ください。

○令和七年一月に、名簿発行を予定しています。名簿発行はサト(株)に委託しており、来年より、会員の皆様宛に住所等の確認葉書をサトより郵送しますのでご協力お願いいたします。

ホームページ QRコード



津高同窓会のホームページ

<https://tsuko.jp/>

メールアドレス
office@tsuko.jp

TEL・FAX 059-229-7331